

第5回 ニッケピュアハート エッセー大賞

<高校の部 優秀賞>

おかえり

板谷崇央

夏休み図書館へ通いだして三日目小さな椅子にちょこんと座って本を食う様に見える男の子に気がついた。何を見ているのだろうか、さりげなく覗いて見ると電車の本だった。次の日もその子は同じ椅子で電車の本を見ていた。私は何となく気になって時々、視界の端にその子を見ていた。本を見ている顔がとても真剣で、その真剣さがかえってかわいらしかった。男の子を見てから一週間目、その子の前を通る時「こんにちは」と小さな声で言ってみた。けれど目が合っただけで返事は返ってこなかった。次の日も声をかけた。でもまた同じだった。図書館だからうるさくしてはいけないと思いつつも「電車、好きなんだ」と言うと、私を見上げる顔が少しだけ笑っていた。でもそれだけ。言葉はなかった。私がなぜその子にこだわったかという、私も幼い頃電車大好き男の子だったから。ある日、その男の子のお母さんがいた。私が前を通る時「こんにちはのお兄ちゃん」と小さく男の子がお母さんに言った。するとお母さんが「いつもありがとう」と静かに笑った。気がつかなかったけれど、少し離れてお母さんはいつも男の子を見ていたのだ。お母さんに見られていたのだと思ったら急に恥ずかしくなった。その日の帰り際、お母さんが私に追いついて話し始めた。「自閉症って知ってる？あの子私にもめったにしゃべってくれないのだけど、君が話しかけてくれて、とても喜んでいるのよ。」

次の日から一週間私は学校の夏期講座のため図書館へは行かなかった。久しぶり図書館へ行った。男の子はいつものように本を見ていた。私は前のようにさりげなく「こんにちは」と言った。男の子の顔がゆっくり上がって目がしっかり私を見て唇を動かした。

「おかえり。」